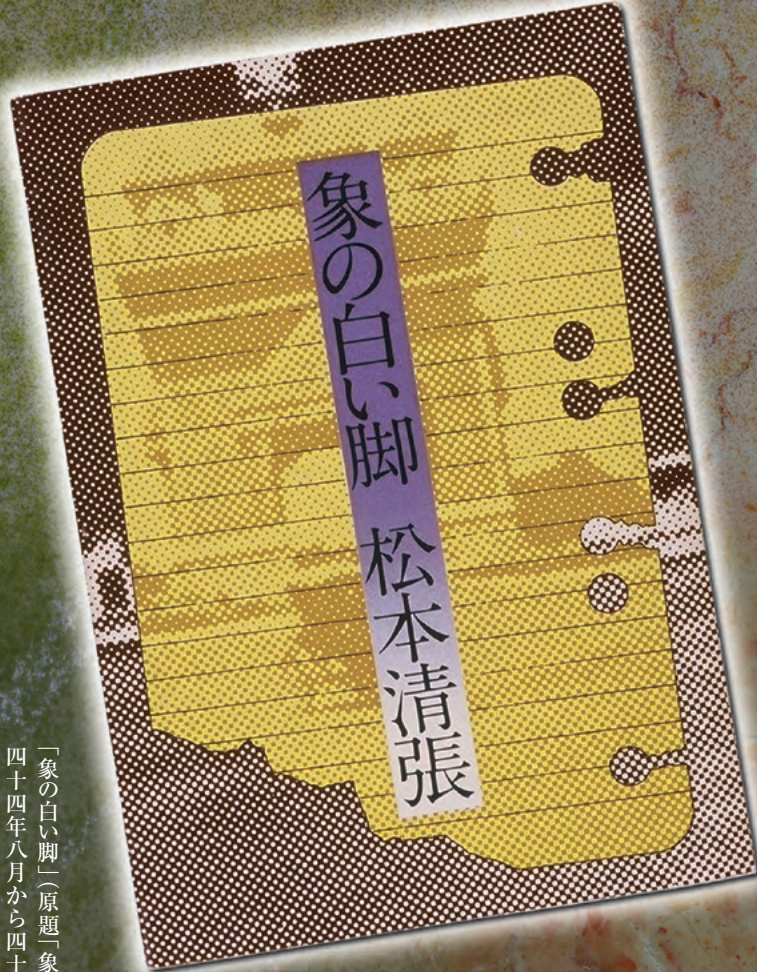


松本清張記念館

◆館報◆

2011.8
第37号

だから、彼らは戦争末期には
ダブル・スパイだったわけだな。



『象の白い脚』昭和49年6月 文春文庫

現在入手できる本
『松本清張全集』第22巻
文藝春秋

谷口は She is not ……の

行方をまだ追っていた。

「象の白い脚」(原題「象と蟻」)は、昭和四十四年八月から四十五年八月まで、「別冊文藝春秋」に連載された。

作品紹介

谷口蘭郎はラオスの首都ビエンチャンへやって来た。この地は、知人の石田伸一が取材で訪れたままメコン川で水死体となつて発見された場所だった。

石田が死の直前まで使っていた部屋に泊まるため、谷口はホテルに向うが、飛行機で隣合わせた西洋人がすでにチエックインしており、しかもその部屋で殺されてしまふ。

「中立国」でアメリカの莫大な援助を受けているラオスは、CIA暗躍の場でもあった。国内では政府軍と共産軍が紛争を繰り返しており、アメリカの軍事援助に頼る政府軍は腐敗し、将軍は部下を束ねるために金を使う。その金は山岳民族に栽培させたケシ、すなわち阿片を転売する「商売」で得るといふ。

酔いどれの女性通信員・シモーヌや、レストランと本屋を経営する平尾正子など、長年在住している謎の外国人が登場し、阿片をめぐる工作と過去の出来事が解明されるが…

(専門学芸員 柳原 暁子)

目次

- 『松本清張と東アジア』記念シンポジウム
記念講演「文学はすべてミステリー」…………… 2
パネルディスカッション
『東アジアで読まれる松本清張』…………… 4
- 松本清張研究会第24回研究発表会…………… 6
- 展示品紹介…………… 7
- 友の会活動報告…………… 7
- トピックス…………… 8

「松本清張と東アジア」記念シンポジウム

〔共催〕朝日新聞西部本社 〔後援〕九州朝日放送

●日時 平成二十三年三月二十六日(土)午後三時
●会場 北九州市立男女共同参画センター・ムーブ「ホール」

第1部

『文学はすべてミステリー』

講師 阿刀田高

(作家・日本ペンクラブ前会長)



清張さんが考えた文学とは？

松本清張という人はご承知のように、あまり豊かではない青少年時代を送りました。ただ、若いときから大変に好奇心旺盛な読書家であつたろうと思います。読書はお金のかからない趣味です。古本屋に行けば安く買えるし、図書館でただで読むことができます。人から借りるという手もある。比較的安く楽しめる割には、非常に深い内容を持つている。だから、恵まれない少年、青年にとっては、実によい趣味となりうるわけです。しかも、清張さんは好奇心旺盛で本当にいろんなものを読んだであろうと想像できます。

「週刊朝日」の懸賞小説で「西郷札」を応募して、三等賞をもらった。満を持して「或る『小倉日記』伝」を書く。これが目出度く芥川賞を受賞して、いよいよデビューしたというプロセスです。「西郷札」がああいう歴史的な作品でしたから「或る『小倉日記』伝」も最初直木賞候補になつたのですが、内容的に芥川賞の方がふさわしいということで、芥川賞に回つたという経緯がありました。

こんなことをお話ししたのは、松本清張が考

松本清張は推理小説作家だったのか？

松本清張は推理小説の作家として、大変な人気を得て、大変評価されている。でも実際、清張さんは推理小説の作家であつたのか。私は少し疑問を持っているんです。

まずデビューのときは、けつして推理小説を書くと思つてはいたわけではありませぬ。「西郷札」もそうですが、この時代は特に大衆が好む歴史時代小説が多い。「或る『小倉日記』伝」も、知的好奇心を持って、森鷗外の小倉での生活を懸念に追究する主人公の姿を克明につづつた人間のドラマです。「張込み」という作品は、推理小説に手を染めた初めだと言われている。確かに殺人犯も刑事も出てくる。でも、推理小説だろうか。殺人犯の青年が昔の恋人の所にやってくるに違いないと思つて、刑事が張り込んでいる。彼女は後妻に入つて先妻の子三人を一生懸命育てている。この味気ない生活を送っている女の人の、かつて、殺人を犯すほどの男との激しい恋があつたんだろうか。刑事が向かいの二階から、女の生活をずつと朝から晩まで見ている。そこに人間のドラマが見える。別に推理小説ではなく、普通の小説として読むこともできるわけです。

そういう小説を書いているときに、「旅」という旅行雑誌の編集長が鋭敏な方で、松本清張さんの中に何か謎を追究する資質があるなど感じてお願ひし、書いた小説が「点と線」であつたわけです。これがめつぽう面白しろかつた。しかし、本当に推理小説として文句なしにいい作品かというところ、ちょっと疑問がある。でも、日本人としてクロフツを超えるような、非常に面白い鉄道ミステリーを書いたということ、一気に松本清張という作家にみんなの関心が集まつた。そして、「眼の壁」「ゼロの焦点」、少し間を置いて「砂の器」が書かれていた。何より大衆が非常に喜んだ。清張さんは自分の興味の在り方や小説に対する考え方はきちんと持っていた。が、同時に大衆が求めるものを書

いて楽しませたいという願ひも一方にあつた。ミステリーが日本でブームになり、結果として「推理小説の作家」というレッテルが松本清張に貼られてしまつた感じがあるのです。

本当に書きたかつた小説

しかし、松本清張は本当に推理小説の書き手であつたか。本当は普通の小説を書くかと思つていたと思う。では、普通の小説とは何なのか。「人間を描き、社会を描く」のが、簡単にいえば普通の小説だと思ひます。読み終えて、「ここに一つの人生があるな、ここにある時代の姿があるな」と実感させてくれるのが、私は普通の小説だと思ひます。推理小説は必ずしもそうではない。推理小説という言葉自体が松本清張の登場と共に成立した言葉であつて、それ以前は「探偵小説」を呼ばれていた。探偵小説は、犯人が鍵の使い方や密室殺人などいろいろ一生懸命考へて、とても不可能のような殺人事件を考へる。非常に現実生活とは違うものを作つて、その謎解きの面白さを楽しんだわけです。読み終えて、人生や社会について考へるなんてことはあまりないのです。

松本清張はそれが嫌いだつたのです。普通の小説を書きたい。「人間とは何か、社会とは何か」を書きたいと思つていたので、そういう現





実から離れた殺人事件など、本当は好きではなかったんです。けれども、清張さんは小説の本質として『小説はすべてミステリーである』と考えておられたと思います。つまり、小説はそもそも何かしら謎が最初に提示されて、その謎が読みすすむ内に段々深まっていく、ある頂点に達したときからその謎が段々解けていく、最後に一応解決を見る。これが小説の基本的な構造であって、小説の楽しみ、ストーリーの楽しみとは結局、そこにあるんじゃないか。面白い小説はほとんどがそういう構造になっている。世の中には謎がいっぱいある。その謎を一つずつ解きほぐしていく、真相は何かと問いたかった。それが、ミステリーという謎を主体にする作品と非常に結びつき易かったのは、そのとおりだったと思います。国民もミステリーを要求していました。そういう時代と合致したのです。

でも、松本清張さんは謎解きをするときに、「自分は動機を大事にしたい」と考えました。何故この男は殺人を犯すようになったか。その

動機を重視すれば、そこから人間というものが見えてくる。その人にはそうしなければならぬ事情があったわけですね。そこをしっかりと捕まれば、必ずと人間が浮かび上がってくる。従来からの探偵小説は、殺人事件の原因・動機は一通り説明がつけば、それでいいんです。

特に「ゼロの焦点」には、松本清張の考え方が非常にしっかりと現れております。この作品は、時代でいえば、昭和二十年代の初めで、その時代だから初めて成立するドラマです。本来は普通の家の普通の娘として育つべき女の人が、戦禍にあつて一族をみんな失ってしまい、闇の女をやらざるを得なかった。後、金沢に行つて社長さんの後妻になり、もともと賢い人でしたから、金沢の文化人としてそれなりの女性としての立場を回復するわけですね。そこに、たまたま昔を知る男が現れる。男に悪意はないが、彼女は自分の恥部を考えると、その男の存在が気になって仕方がない。あるとき、男と能登金剛の崖っぷちに立つ。ほんと突き落とせば、その男は死ぬという状況があつた。そのとき、ついすと押ししてしまう。松本清張さんはあの戦争が一人の普通の女の人にもたらした大きな悲劇を書いた。そこから推理小説が誕生した。動機を重視すること、その犯罪者が殺人を犯す背景をきちっと追究することによって、その人の人間性、その時代の社会を描こうとした。面白くするために、トリックはいっぱい使いました。でも、基本にあつたのは、『人間の謎』、社会の謎を解く姿勢で、別に推理小説的な謎解きは絶対の目的ではなかったのです。

「点と線」では、東京駅の十三番線から十五番線ホームを見通して、向こうに二人づれの男と女がいる場面を見たという、有名な「四分間の空白」トリックがよく話題になります。しかし、ゆっくり読むと、だからどうしたんだとも言える。多少の顔見知りの二人だったら、ホームに上がる階段でたまたま一緒になったら「あなたもこの電車、じゃあ」と言つて一緒に歩いていくことは、いくらでもあるわけです。ホー

ムを一緒に歩いてきたから、この二人はできてるといふのは、もう少し説明してくれないと頼りない。推理小説の美学として考えると、あまり素敵なことではないんです。

でも、清張さんが書きたかつたのは『ミステリー』なんです。トリックではなく、本当の『謎』なんです。手品みたいなトリックや伏線はそんなに重要ではない。大衆が喜ぶから、それなりに散りばめたけど、本当に好きだったのはやっぱり『社会の謎』、『人間の謎』を究めていくことだったろう。そして文学や小説は、中にミステリーの構造を含んでいた方が面白い。謎が提示され、その謎が深まり、徐々に解けていくって大団円に達するという構造が、読者を喜ばせる一番のものなんです。たまたま殺人事件が絡んだ推理小説がそういう設定になりやすかった。私は、清張さんもそれをどんどん書くことになつた。私は、清張さんが結果として推理小説をあれだけ書き、推理小説の作家たとなつたことは、少し不幸であつたかもしれないと思ひます。推理小説ではなく、例えば、『日本の黒い霧』『昭和史発掘』といった時代の闇をえぐるような作品が、本当は清張さんの一番むいてる作品だったのではないかなと思ひます。

清張さんと東アジア

小説家としてデビューするまでに具体的に体験した海外は、衛生兵として行った韓国しかありませんでした。小説を書き始めたとき、その体験を元にくつつかの作品を書いています。小粒ながら面白い作品があります。『絢爛たる流離』の中にも、朝鮮半島で終戦を迎えた人たちの非常に辛い哀しい作品も入っています。徴兵制度という軍隊のシステムを批判しながら書いたような作品「遠い接近」もある。でも、これらは個人的体験から知つた朝鮮半島で、まだまだ本格的に外国を描いたものという感じはしません。

大作家、松本清張になつてから、海外に旅し、

小説家として、ものを書く人間として、ジャーナリストとして、海外を見ると機会が増えました。大きな目で現代のリアルタイムの海外を見るときは、むしろ後半生になつて初めて出会つたチャンスでした。日本の太平洋戦争をめぐる前後の時代を考えると、中国を初めとする東アジア、東南アジアあたりとの関わりは非常に深いものがあります。ある時代、日本は明白な侵略者であつたし、日本の富を作るためにこういう国々を利用した時代もあつた。アメリカを中心とする大きな勢力がアジアに対して独特の関心を持つようになってきたのは、昭和二十年以降、まさに松本清張が生きた時代のものでした。やはり日本と戦後を考えると、アジアに対して興味を深まっていく。いくつもの謎がある。大きな、世界的な謎が横たわつている。ベトナム戦争などに興味を覚えて、ノンフィクションの形で直接その時代を事実として書いていく。やがて、そういうアジアの謎も一番得意な推理小説という形の中に組み込もうとした。「熱い絹」や「象と蟻」という推理小説です。しかし、それが一番幸福だったのかどうか。

特に後半生、本当に興味のあるものを書いていく。国際情勢に対してもほとんど興味を深くなつていく。題材を正面から見据えて、『社会の謎・人間の謎』を追究して書く方が、この作家には向いていたのではないかと私は考えます。もつと時間をかけて巧みに書いたら、この方面でもものすごい作品が出てくる可能性があつた。しかし、ご本人が悔しがつていたとおり時間がなく、書き尽くせなかつたのではない。松本清張の代表作は何かと問われたとき、非常に困る。推理小説は弱点のあるものが多い。むしろ短編小説の方にいいものがある。『昭和史発掘』にこの方の代表作を求めるときにはないか。「神々の乱心」はそれをほのめかしているが、天皇家を中核とした日本のアジア政策というあたりが、本当の代表作が出るころではなかつたのかなと思ひます。

パネルディスカッション 『東アジアで読まれる松本清張』

パネリスト

パネリスト

司会・コーディネーター

コーディネーター

藤井省三（東京大学教授）

王成

（中国・清華大学教授）

奥田智子（九州朝日放送アナウンサー）

野上隆生（朝日新聞西部本社）

基調講演

藤井省三

中国における翻訳『砂之器』と映画『砂之器』
現代中国を映し出す両面鏡としての松本清張

改革開放の中国と劉心武という作家

劉心武という有名な中国人作家がいます。

一九四二年生まれ。一九七六年に毛沢東が亡くなり、そこに中国人の期待を集めて登場したのが鄧小平でした。鄧小平は『改革開放政策』を進めますが、彼が中国共産党の主流派になるのは一九八〇年ごろで、その過渡期の中国文壇にデビューしたのが、劉心武なのです。文革が終わった翌年一九七七年に、中国共産党直系の権威の高い雑誌『人民文学』に「クラス担任」という作品を発表します。

「クラス担任」の内容は、『松本清張研究』第十二号掲載の論文に詳しいので省略しますが、当時はまだ直接の毛沢東批判は憚られるので、文革前は革命小説の名著とされていたが、文革中は焼き捨てられた『牛虻』という外国文学の翻訳を復活させるという物語を通じて、毛沢東路線の教育システムを批判した内容と言えます。つまり、鄧小平を支持しているわけではなく、劉心武という人はかなり政治が読める方なんです。劉さんは重用され、とんとんと出世して、三代という若さで、共産党政府がお金を出して運営する中国作



王成先生

藤井省三先生

家協会の理事に抜擢されました。

正反対の松本清張イメージとその謎

そして、一九八一年に日本にやってきます。文藝春秋の招待でした。劉心武はそのときの経験を「中国作家の見た『初めての日本』」というエッセイに書いて、『文藝春秋』に発表しています。そのなかで、劉さんは「松本清張先生のお宅を訪ねましたとき、先生は自ら書齋や書庫を案内してくれました。そこで感銘を受けたことは、研究、趣味を含めて、先生の関心が各方面にわたり、しかも非常に学識が深いことです」と絶賛しているわけです。ところが、十一年後、清張が亡くなりますと、劉心武は「松本清張ひとたび去りて返らず」というエッセイを、その名も「随筆」という中国の雑誌に書きます。

「作家がこんなに醜くて良いのか？有名作家がこんな容貌ということはあるのか？正直に言うと、これが十一年前に私が日本の東京で推理小説の大家松本清張に会った時の第一印象であった。」とあり、続けて「驚いたのは彼の顔つきである。（中略）両眼は深いほら

洞に隠れているかのよう、ほの暗く冷たい光を放っている。ギョッ！」最後は「ギョッ！」なんです。なぜこの十一年間で、劉心武の松本清張イメージが正反対になってしまったのか。

謎解き

『劉心武と中国社会はどのように変わったのか』

劉心武の追悼文を読むと、映画『砂之器』が大変大きな役割を果たしていることが分かる。一月前に、たまたまテレビの深夜放送で『砂之器』を二度目に見たと書いています。今回は息子さんも二十歳くらいで、しっかりと受けとめて父親に向かって議論をふっかけてくる。「この作品を書いた人は、（つまり松本清張ですね）その内心はきつともすくく孤独なんだと思う」という息子の言葉を受けて、父親である劉さんは「そうだ、私は松本先生がものすくく孤独だと感じた」と思い出すわけです。突然、清張は『孤独』だと書くのです。この変化の原因の一つは、映画『砂之器』を二度目に見て、父と息子の孤独な状況に深い印象を受けたからではないかと思えるのです。

もう一つ、この間に劉心武にも大きな変化が起きています。八十年代の半ば、彼は「人民文学」の編集長になっていた。大変高い地位です。ところが、一九八九年に突如、解任されてしまいます。この年の六月四日に民主化運動を圧殺した『天安門事件』が起きていた。「人民文学」

もこの時期は割とリベラルでした。そのときの編集長が劉心武で、事件の余波で解任されてしまふ。そして、中国の経済的繁栄の記念碑的な原点の年一九九二年に、劉心武は華麗な転身をとげてエッセイストとなります。

映画『砂之器』によるイメージ操作

追悼文を読むと、劉心武はいつも松本清張の作品は読んでいないみたいです。「私は息子に言った。『砂之器』の例の音楽家は、大泣きしながらあの大曲を演奏するとき、彼は内心でどんなに苦しんでいたことか！」と書くように、映画の方の印象が強かったようです。加藤剛が演じる息子が、ハンセン氏病だった父と流浪の旅をしていったあの辛い日々を、自ら作曲した曲をピアノで弾きながら思い返していく。あの非常に切々と迫る名場面、あれは原作の小説にはないんですね。

ハンセン氏病で手が曲がらない、顔も変わってしまっている、父親の加藤嘉の名演技が頭に入っている、それが十一年間の間に、「醜い孤独な人」という清張イメージを膨らませ、松本清張の顔と重なって「ギョッ！」という反応になったのではないかと。また、ハンセン氏病患者として社会的に差別される親子の醜さと孤独を、劉心武は清張本人に当てはめてしまったのではないかと、とも感じます。これが、劉心武をめぐる謎解きの一つです。

基調講演

王成

清張ミステリーと『改革開放』の中国

一九八〇年代の清張ブーム

中国の読者と清張ミステリーとの出会いは、まさに「改革開放」とともに始まった出来事の一つだと私は思っています。私はちょうど、高校は一九七八年に入学して、大学は一九八一

年。まさに私個人の成長ととも

に「改革開放」の三十年間を経験してまいりました。その中で、清張との出会いは私にとっても大きな意味を持っており、一九七九年に出版された『点と線』は初めての推理小説でした。面白いことに出版したのは警察官向けの



出版物を出す出版社なんです。しかし、「点と線」の面白さは一般読者の間にもすぐに広まりました。

松本清張の作品が中国の読者の間でよく知られるようになったのは、実は先ほど藤井先生がご紹介されたように映画『砂の器』のヒットからなのです。一九八〇年に中国大陸で上映されましたが、私は大学受験で忙しい中でも、友だちと授業をさぼって二、三回は観たと思います。それまで中国人は『砂の器』のような映画は観ることが出来なかつたんです。『砂の器』のヒットの余波として、中国全土で清張ミステリーの出版ラッシュが起きます。統計してみますと、四十の出版社から五十点以上の長編小説が出版されました。当時の文芸雑誌に清張の短篇もたくさん翻訳され掲載されました。例えば、『歪んだ複写』という小説があります。翻訳者は大学での私の先生なんです。金中先生、現在も中国で有名な翻訳者です。『歪んだ複写』は初版で十八万部刷つたそうです。今は初版で五、六万でも多い方です。

清張の中国初訪問とその影響

もう一つご紹介したいのは、一九八〇年代、中国の読者が松本清張を注目したもう一つの出来事です。それは、一九八三年の初めての中国訪問です。その際に、北京で周揚中国文学芸術連合会主席などと会見なさつたんです。その中で語られた清張の文学論が、当時の中国の文学界に大きな影響を与えたことを強調したいと思います。清張さんは特に「文学は面白いことが第一」「説教調のものでは読者に飽きられる」と強調されました。その言葉は、当時の中国の作家たち、あるいは文学界にとって、非常に示唆のあることだったと思います。

また、北京での訪問は短かったが、私が最近調べた資料では、歴史小説作家の姚雪垠氏との対談がありました。当時中国で、彼が書いた『李自成』という歴史小説がベストセラーになっ

ていたんです。それをめぐっての対談の中でも「小説はやっぱり面白くなければなりません」と、繰り返して語られました。それまで中国では、スローガンのある、あるいは紋切り型の作品が横行していたわけですね。清張の中国訪問が中国の文学界に新風を吹きこんだと私は強調したいと思います。

一九九〇年代以降の中国は、日本の高度成長期と良くも悪くも似ているようになりました。そういう社会背景を持った読者は清張ミステリーにより大きな共鳴を感じたのだと思います。

清張ミステリー風推理小説の登場

一九八〇年代、革命リアリズムに束縛されていた作家は清張文学に新しさを感じました。数多くの作家が清張ミステリーを愛読しました。例えば、中国現代文学の代表作家の一人である王蒙氏は「生活の息吹を傾けて」の中で、「私は松本清張の推理小説を面白く読んでいます」と彼の読書経験を語っています。若い世代の作家たちにも、私はインタビューを取りました。藤井先生も翻訳なさった莫言さん、余華さん、格非さん、彼らは口をそろえて「松本清張の小説、私たちはよく読みましたよ」と言いました。

清張ミステリーの手法、技巧は中国現代作家の学ぶ対象でもありました。特にご紹介したいのは、清張文学受容の実りとして最近二〇〇七年六月に刊行された『火の杏』という小説です。中国語では『杏焼紅』。つまり「中国初社会推理小説」と銘打たれました。中国の南部地方で不動産会社を経営する有力者の二人が相次いで死亡する事件が起きます。雑誌記者が現れ一生懸命調べ、警察に協力して事件に挑んでいきます。事件の解決とともに、二十八年前、都会の若者たちが農村部に下放された歴史を背景とした殺人事件だったことが判明します。文化大革命の暗い一面は、未だに中国人の心にトラウマとして残っているのです。あとがきに「文学

性を損なわないトリックや殺人事件の裏に隠された社会性を、小説の両翼として求められる姿勢は清張ミステリーの特徴によく似ています。」とあります。まさに清張ミステリー風の推理小説の登場です。清張ミステリーの中国での影響力の大きさがうかがえます。

パネルディスカッション

■司会・奥田 「点と線」が警察官向けの教材だったというお話ですが。

■王成 まず当時、ミステリーは中国で出版することが難しかった。そういう背景が一つ。もう一つは、改革開放で「外国のものを取り入れよう」となりましたが、編集者たちには「でも、大丈夫か」とまだ不安がありました。ですから、警察官の参考書とすれば、無難だというような歴史があったのです。

■司会・奥田 お二人の話で、映画『砂の器』が大きなポイントになっていました。

■王成 私自身、観るたびに涙を流したんです。今回も来る前に、学生諸君と一緒に観ました。もう全員、涙ぼろぼろ流したんです。映画『砂の器』は、人によっていろんな読みとりができる。例えば、人間誰でも触れられたくない自分の過去があることとか、あるいは人間社会に残る差別という構造の問題とか。特に一九八〇年代までの中国社会は階層によって差別があった。革命は平等をうたいながら実現できなかった。藤井先生もおっしゃったように階層や貧富の差、差別も大きなテーマだと思えます。

例えば、父と子の物語、要するに一九七〇年代、文



化大革命の中で隣同士でも密告されたり、親子でも自分の革命性を強調するために子が親を裏切るとか、割とあったわけですね。そういう歴史的な事件のトラウマを持っていて私たちが、映画『砂の器』の親子に共鳴を感じたのではないかと思います。ただ今の中国人はそれほどトラウマを持っていません。

■司会・奥田 今日のまとめとして、お話を。

■王成 最後に、清張文学を通してのアジアや東アジアの交流の大事さを個人的に呼びかけたいと思います。「怖い国だ」と色眼鏡は付けずに、実際お互いに交流してみることが大切です。私がおここに座ることの意味もそこにあるのです。

■藤井 松本清張をはじめ村上春樹も吉本ばななも、推理小説の東野圭吾も、たくさんの作家が中国で翻訳されています。しかし、我々日本人は中国の現代作家のことや、若い人から高齢者までの中国人の考え方や考え方はあまり知らない。中国で清張の推理小説がたくさん読まれているように、我々も、先ほど王先生がご紹介の『火の杏』や、ほかにもたくさんある中国人の推理小説をどんどん日本語に翻訳して読み、中国のことを理解すべきだと思います。

■司会・奥田 最後に、藤井先生、「東アジアの松本清張」をテーマにした国際共同研究のご提案ですが。

■藤井 東アジア各国のそれぞれ違う松本清張体験や読み方の比較研究を、王成さんのような中国の第一流の研究者や、韓国や台湾や香港や、あるいはシンガポールなどの研究者や批評家たちと一緒にやって共同研究として立ち上げられたらいいなというのが、三ヶ月前の初夢でした。この北九州市を拠点として。

松本清張研究会 第24回 研究発表会

平成23年6月4日(土)午後2時 昭和女子大学

『東夷伝』序文の重要性

松本清張は、魏志倭人伝は中国と朝鮮を含めた東アジア世界全体で考えるべきだと指摘しました。

私が「東夷伝」の序文の重要性に気づいて発表したのが、二〇〇九年三月「三国志東夷伝の文化環境」(歴史研究報告一五一集)です。序文には、まず「書稱」(書にいわく)とあります。この「書」は「尚書」です。そして、「東は海にいたり、西は流砂におよぶ」までの範囲がまさに中国の天下なのだというところをえ方です。「九服之制」(『周礼』)です。清張はこの序文にすでに注目していました。

中国には戦国時代から「天下観」がありました。「尚書」や「周礼」の思想に基づいた理想の国家像、天下像です。「方万里の天下」です。まず「方千里」の「王畿」があります。この「畿内」を中心とした千里の世界が王侯の統治する地域です。そして周辺に五百里ごとに、「候服」「甸服」「男服」「采服」という形で拡がっていく。「方三千里」から「方五千里」と世界が拡がっていく。漢の時代にすでに、「方万里」という疆域が存在していました。「方万里」の外の世界は蛮族の世界、夷狄の世界です。このような「方万里」九服制に基づく天下思想が「東夷伝」の序にも貫かれています。ことに、私自身気づかされたわけです。

『清張古代学』

魏志倭人伝から魏志東夷伝の考古学



講師 東 潮

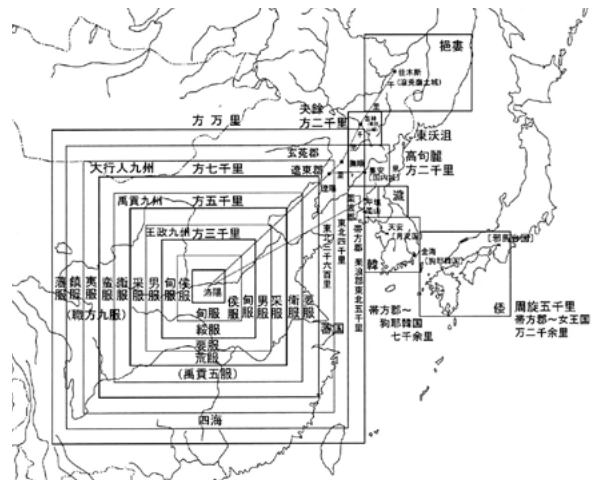
○徳島大学大学院 教授
○専攻 東アジア考古学
朝鮮韓国考古学

『漢書』地理志には「西域伝」があり、西のことがわかる。東夷諸国については魏が公孫氏を滅ぼし、天子の権威が及ばない「絶域」が解放され、次いで高句麗を滅ぼして初めて記述できるようになった。「西域伝」を意識して書いています。この序文に書かれていることはまさに「天下思想」で、そのまま「三国志」を貫いて「東夷伝」に展開されているのです。

『魏志』倭人伝の里数、日数は虚数

当時、遠い諸国はすべて「万二千余里」である。それは中国からは「遠絶の地域」をいう形容的な表現で、距離数や戸数は実数ではなく虚数である。それが倭人伝の世界であると、松本清張は見抜いていました。そして、「それはすべて陳寿が机上で作ったもの」だ。「虚妄だ」と、数字を切つて捨てた。しかし、陳寿は、魏の天下観にもとづいて記述したということが重要なんです。そこから私は出発しているんです。根拠は「東夷伝」の序文の検討によつてうらづけることができます。「方万里」の彼方は蕃国の世界という捉え方です。新疆の西の方、カシユガルの西の方に、大月氏国があります。これも「万二千六百里」。倭国は「万二千里」です。東西、同じ時代に記録があり、二二九九年に親魏倭王の金印が、二二九九年に親魏大月氏王の金印が出てくるんです。これは清張も考察しています。

「東夷伝」倭人伝の距離数、里数はすべて整合性のあるような数字です。帯方郡から韓国金海の狗耶韓国までの距離も七千里で、そこから千余里で対馬、対馬から沓岐が千余里、九州に入つて末盧国から伊都国までが五百里。あと百里になつていく。たとえば、邪馬台国は七万余戸、そして、投馬国が五万余戸、あと奴国とか全部合せて三万余戸。これは陰陽五行説による好数の



七・五・三ですね。最初は白鳥庫吉が述べたことですが、それに着想を得て、松本さんは陰陽五行説にもとづき里程論を展開していき、全部数字合わせで陳寿が創作している。意味のある数字を作っていることが重要なのです。

邪馬台国論

墓の構造、鏡の出方、前方後円墳の様式とかをみて、邪馬台国の範囲はのちの「畿内」にほぼ該当するのは事実です。大阪平野から奈良盆地、山城盆地を含めた範囲で、「逃げ水 邪馬台国」に出てくる椿井大塚山古墳もまさに邪馬台国の中におさまるのです。王都は纏向附近です。

ホケノ山古墳は、三世紀の前半の古墳ですが、大事な古墳です。これから箸墓古墳や桜井茶臼山古墳に変化していく。石室の構造は積石木槨墓です。私はこの邪馬台国の中に二つの系列の墓、倭王系列の墓と邪馬台王系列の墓があることを従来から主張しております。邪馬台王系列はホケノ山古墳から桜井茶臼山古墳へつらなる。べつに倭国王の墓があり、それが倭王卑弥呼の墓であり、箸墓古墳だと思います。

三角縁神獸鏡問題という難題に、清張はとりくみました。三角縁神獸鏡は私は魏鏡だと考えていますが、呉の工人在日本でつくつたという説があります。清張は王仲殊説に立つならばとして、新たな解釈をうちだしています。

『三国志』倭人伝「関係の私の説の一つが、黒塚古墳で出土したU字形の鉄製品は『黄幢』で、古墳の被葬者は難升米と考えています。『黄幢』は軍旗です。軍旗だと明言している人は、ごくわずかです。その一人が清張です。その政治権力・軍事への感覚はさすがです。二四五年に難升米に『黄幢』を仮授している。私は魏と倭の軍事同盟の象徴がこの軍旗だろうというところまで展開しています。二四七年、狗奴国との戦いの中で、難升米に詔書とともにわたしています。仮授はあくまで高句麗戦争のためでした。

そして、「逃げ水 邪馬台国」で、清張は邪馬台国「近畿説」に傾いていかれたような気がします。三角縁神獸鏡が三十二枚出土した椿井大塚山古墳の被葬者は、空想だがと断つてはいるが、難升米の子孫だろうと言われている。確かに椿井大塚山古墳は重要で、五尺に近い長い刀も見つかっている。黒塚古墳でも出ているが、最高の武器なんです。鏡の多さもあるし、記録に出てくる相当の人物でしょう。しかし、難升米子孫論は残念ながら年代が合わない。難升米の墓は黒塚古墳だと思います。

魏の甲冑も出土しています。その時期の日本列島で作れないものです。魏の使者が持つてきた甲冑です。魏との深い関係が見られます。黒塚古墳、椿井大塚山古墳、兵庫西求女塚古墳、岡山浦間茶臼山古墳、福岡豊前石塚山古墳、つまり三世紀のころに勢力を誇つた地域に分布しています。各地各地の埋葬祭祀の諸要素を奪いかすめとりながら、自らの権力の基盤にして巨大な前方後円墳が造営された。箸墓古墳です。これが倭国王卑弥呼の墓です。

研究発表 『清張推理小説にみる動機と性格に対する検討』 発表者 和田 稜三 (京都外国語大学非常勤講師)

「古代探求」校正



原稿を活字にした試し刷りの校正紙を「ゲラ」と呼ぶ。最初を「初校」といい、著者のほか担当編集者や校正者によるチェックも反映し修正され、版が改まるたびに「二校（再校）」「三校」……と数える。

常設展示室2の書斎前に展示されているのは、「古代探求」（「古代への探求」として昭和四十六年一月から翌年十一月まで『文学界』に連載）のうずたかいゲラの束である。この作品では清張は緻密な推敲を重ね、なんと六校まで取った。出版界では通常二校か三校で校了にするから、異例の回数

である。初めに単行本の原稿として、雑誌を一ページ分ずつ一回り大きな紙に張り、作業しやすくしたうえで加筆が行われている。その後、修正を反映した印刷所からの校正紙にもさらに筆が加わり、最終的に全体の半分近くが改稿されている。清張自身、作中で「当時の考えをその後の進展で訂正したり、新しくつけ加えた」と述べているが、単行本（全集）で刊行され再び読者の目に触れるまでの約一年三ヶ月の間にも、考究が深め続けられているのだ。

校正紙の変化をつぶさに追っていくと、印象的な一文「わたしは日本古代史にはアマチュアであり、門外漢である。だが、専門外の『特権』をみだりに振り回すことはつつしんでいる。」も、雑誌掲載後に加筆されていることが分かる。一旦は「わたしは学問にはいわゆる素人である。だが、専門外の『特権』を振り回すことはつつしんでいる。」だったが、表現が練られ、ニュアンスも変化している。

校正は、出版のプロセスのひとつにすぎないかもしれない。しかし、この本の校正の軌跡は、二十代の終わり頃から考古学に関心を持ち、史料にもできる限り足を運び、史料や資料、論文や専門書も渉猟してきた清張の、常に探求し続ける姿勢がうかがえる貴重な資料である。

（専門学芸員 小野芳美）

友の会 活動報告

朗読劇「断碑」

4月16日（土） 参加者 81名

今年で8回目を迎える朗読劇は『断碑』。考古学の保守的な世界での主人公の不屈の生涯を描いている原作と、「作家・編集者」の登場という二重構成がとても新鮮で、うまく組み合わせ、観ている私達の気持ちもグッと惹きつけられました。

役者の方々の臨場感あふれる「さまざまな声」、それぞれの場面を連想させるような「照明」、想像力を



かきたてる「音楽」とすべてが一体となって作り上げていく特別な空間に参加者の皆様からも感嘆の声を多数いただきました。

文学散歩「飯塚」 5月20日（金） 参加者43名

今回は、清張さんの青春時代の思い出の地「飯塚・幸袋」を中心に、盛りだくさんなコース設定となりました。また、今回の文学散歩は、訪問先にうれしい出来事が続いたことでさらに私達の心に想い出深いものとなりました。

飯塚市幸袋→旧伊藤伝右衛門邸→嘉穂劇場→飯塚市歴史資料館→王塚装飾古墳館を訪れました。旧伊藤伝右衛門邸では庭園の美しさや建物の造り、調度品等に柳原白蓮に対する伊藤伝右衛門の想いを感じました。また、「庭園」が国の名勝に指定されることが文学散歩の翌日に発表されました。嘉穂劇場では時代を超えた趣きを感じました。飯塚市歴史資料館で鑑賞した「山本作兵衛」氏の『炭鉱記録画』が、文学散歩の一週間後に国内初の「世界記憶遺産」に登録されたことが報道され、記念館内でも大いに話題となりました。王塚装飾古墳館では清張さんもここを訪れ同じものを見たのかと思うと胸が熱くなりました。



友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集

松本清張記念館友の会は8月1日から翌年7月31日までを1年度として取り扱っています。

今年度も引き続き更新いただきますようお願いいたします。

また、新規会員も募集中です！友の会では清張ゆかりの地の見学、読書会・講演会の開催、会報の発行など多彩な事業を展開しています。会費は1年間で3,000円です。

友の会入会のお申し込みは… TEL. 093-582-2761 松本清張記念館友の会事務局まで

平成23年度
中学生・高校生読書感想文
コンクール

清張作品の読書感想文を、中学生・高校生を対象に募集します。

若年層に、より多くの作品に親しんで欲しい、表現力を学び豊かな心を身に付けてもらいたいという願いから、このコンクールは始まりました。そして、これからを担う若者たちに、探求の人・松本清張の精神を伝えていくことができれば幸いです。

■応募対象 全国の中学生・高校生

■課題図書 中学生・高校生ともに下記から1作品

『球形の荒野』（文春文庫「長篇ミステリー傑作選 球形の荒野」上・下）

『断碑』（新潮文庫「傑作短編集（一）」或る「小倉日記」伝、光文社文庫「松本清張短編全集3 張込み、カッパノベルズ」同、角川文庫「或る「小倉日記」伝」）

『腹中の敵』（新潮文庫「傑作短編集（四） 佐渡流人行」、光文社文庫「松本清張短編全集3 張込み、カッパノベルズ」同）

■応募方法

- 中学生、高校生ともに1,200～2,000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。
- 手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし、全体の字数が分かるように応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。
- 原稿は自作で未発表のものに限ります。なお、応募原稿はお返しいたしませんので、必要な人はコピーをおとりください。

■応募締切 平成23年10月31日(月) ※消印有効

■応募先 〒803-0813 福岡県北九州市小倉北区内2番3号
松本清張記念館 感想文コンクール係
※応募用紙は記念館HPからダウンロードできます。

■選考 松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

■発表 審査結果は、12月下旬頃、本人と学校に通知します。最優秀賞、優秀賞の受賞者には、表彰式を行います。なお、入選の結果や受賞作品を記念館刊行物等に掲載することがあります。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

■賞品 (受賞人数等、変更の場合もあります。)

- 最優秀賞(1人)
《モンブラン》万年筆「マイスターシュテックNo.149」
 - 優秀賞(中学の部…1人)(高校の部…1人) 文具など(未定)
 - 佳作(中学の部…3人)(高校の部…3人)
記念館グッズと図書カード
- ※なお、最優秀賞は中学の部、高校の部で各一回ずつの受賞と限らせていただきます。最優秀賞受賞後の応募も歓迎します。すでに受賞した人からの応募作品が賞に該当する場合は「特別賞」として「館報」掲載を予定しています。

- 主催 北九州市教育委員会
- 主管 北九州市立松本清張記念館
- 協力 モンブランジャパン



イラスト：山藤 章二

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区内2番3号
TEL 093 (582) 2761
FAX 093 (562) 2303
http://www.kid.ne.jp/seicho
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)
小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からは100円バスをご利用いただく便利です(小倉城・松本清張記念館下車)
車: 北九州市高速、大手町ランプより5分

松本清張記念館

第13回

松本清張研究奨励事業
入選企画決定

「松本清張研究奨励事業」も13回目を迎えました。今回も多彩な研究企画の応募が16点ありましたが、『松本清張と東アジア』をテーマとした研究が2点入選し、特に国際共同研究は注目されます。

選考委員会による厳正な審査の結果、次のとおり入選者が決まりました。

企画名 韓国における清張作品の受容に関する調査・分析
(映像化された作品を中心に)

入選者 森脇 錦穂 (共同研究代表・翻訳家)

奨励金 40万円

企画名 松本清張と昭和30年代「中間小説誌」

入選者 高橋 孝次 (共同研究代表・千葉大学非常勤講師)

奨励金 40万円

企画名 東アジアにおける松本清張作品の受容 (国際共同研究)

入選者 藤井 省三 (共同研究代表・東京大学教授)

奨励金 100万円

第14回 松本清張研究奨励事業募集

募集要項

対 象 ① 松本清張の作品や人物を研究する活動
② 松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動
(調査、研究等)
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人又は団体可。

内 容 入選者(団体)に200万円を上限とする研究奨励金を支給します。
応募方法 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的に分かる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成24年3月31日までに応募してください。

※詳しくは記念館までお問い合わせください。

●編集後記●

今年3月の東日本大震災の時発生した福島原発事故は、日本列島全体にいろんな影響を与えています。電力不足が懸念されており、記念館も節電に努めています。

今号は、前号で概要をお伝えした『松本清張と東アジア』記念シンポジウムの内容を詳しく掲載しております。

8月4日(木)開催の開館13周年記念講演会の内容は次号に掲載しますので、楽しみにお待ちください。(西本 衛)

